The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞蜂矢真郷著『国語語構成要素研究』
Author(s)	伊藤, 智弘
Citation	語文. 2024, 122, p. 95-96
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98214
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹　介

蜂矢真郷著『国語語構成要素研究』

伊藤智弘

『国語語構成要素研究』（以下、「本書」）が扱うのは、上代・平安時代を中心とした、日本語古代語における語構成である。

日本語の本格的な語構成研究は、阪倉篤義『語構成の研究』を嚆矢とする。その後の研究は蜂矢氏によって推し進められ、『国語重複語の語構成論的研究』『国語派生語の語構成論的研究』『古代語形容詞の研究』などが到達点を示している（なお、ここに上げた三書は、本書において言及されることもかなり多いため、常に参観できるようにしたい）。

本書（及び、前掲著書）の検討は、『語構成の研究』に基づいた、語構成要素の独立性による分類を軸として進行する。すなわち、名詞・動詞の露出形といった「独立的要素」、接頭辞・接尾辞といった「非独立的要素」、そして「独立的要素」に準ずる単位としての、動詞・名詞の被覆形や形容詞語幹・語基など「準独立的要素」、の分類である。本書は「準独立的要素」を検討の中心に据え、それが独立的・非独立的なものとの間にどのようなものとしてあるのか、を重要な論点とする（「準独立的要素」が含む範囲は、第四章でもさらに論じられる）。

第一篇「形容詞語幹・語基の用法」では、形容詞語幹・語基の語構成上の振る舞いや用法が、ク活用形容詞とシク活用形容詞の異なりを踏まえながら、網羅的に整理される。同趣のものは『時代別国語大辞典上代篇』などにもあるが、それらを踏まえた上での、より広範・精密な記述である。以降の篇は、本篇での検討を基礎として展開される。

なおここでは、いわゆる学校文法とは異なる活用の捉え方がされている。形容詞終止形末尾のシを除いた部分を語基としたとき、語幹と語基が一致するク活用形容詞に対し、シク活用は「語基＋シ」が語幹となり（サカ＋シ［賢］など）、語基と語幹が一致しない（以上のことは『古代語形容詞の研究』に詳しい）。またこのことによって、シク活用形容詞において、語幹と語基との用法の異なりが指摘されることになる。例えば、同じように名詞が下接して複合語を構成する場合でも、語基＋名詞（マサメ［正目］、ムナコト［空言］など）では「状態的意味を表す傾向」が、語幹＋名詞（ハシヅマ［愛妻］、クシミタマ［奇魂］など）では「情意的意味を表す傾向」の存することが指摘される。

第二篇「被覆形と形容詞語基」では、名詞・動詞被覆形と、形容詞語基との関係（類似性）を検討する。ここで重要な類似性として挙げられるのは、いずれも（基本的には）準独立的要素として、複合・派生に用いられることである。すなわち、名詞被覆形もク活用形容詞語基も、名詞を伴って複合名詞を形成すること（サカヅキ［酒杯］、ナガコヒ［長恋］など）、動詞被覆形もシク活用形容詞語基も、動詞化接辞を伴って派生動詞を構成すること（オコス［起］、タダス［正］など）である。名詞被覆形と動詞被

覆形の類似性については、既に有坂秀世・川端善明両氏にも議論がある。本篇は、これらの先行論を承け、発展させたものと言える。

第三篇「形容詞語幹・語基と形容動詞語幹」では、形容詞語幹・語基と形容動詞語幹との関係が整理される。ここで対象となる「関係」は、「形容動詞後項が形容詞語幹（・語基）を持つ」（準独立的要素＋形容詞語幹＋ニ・ナリの例として、マナホニ［真直］など）、「形容詞と形容動詞で語幹・語基が共通する」（独立的要素＋形容詞語幹の例として、シタドシーシタドニ［舌疾］）、「形容詞語幹と形容動詞語幹の相互の派生」（「形容詞の形容動詞化」に、さらに「形容詞化」が重なる例として、アカシ→アカラカ→アカラケシ）である。

第四編「準独立的要素と情態的語基」では、「準独立的要素」について、更なる検討が行われる。その際、「二つ以上の要素の複合・派生により構成されたもので準独立的であると見られる語基」（情態的語基）を中心的な検討対象とする。

注意したいのは、情態的語基は、「準独立的要素」には含めないということである（例えば、トホナガニ［遠長］の語基トホナガは、ク活用形容詞の語幹、すなわち、単独の準独立的要素であるトホ［遠］・ナガ［長］の複合したものだが、準独立的要素とは見ない。派生に関しても同様で、サヤカニ［清］の語基サヤカは、準独立的要素である語基サヤ［清］に非独立的要素である接尾辞カが伴ったものであり、準独立的要素とは見ない）。このような区別は先行論にも似たものがあるが、本書は、語構成の観点からより詳細な整理を施したものである。

第五篇「派生情態的語基の用法と変遷」では、「今後とも発展する見込みのある課題」（「あとがき」より）として、第四章でも扱った情態的語基のうち、派生によって構成されたものについて整理している。

まず、二音節語基が接尾辞ラ・ル・ロを伴う「ラ接尾形」（ヒロラニ［広］のヒロラなど）、同じくリ・レを伴う「リ接尾形」（ハダレニ［薄垂］のハダレなど）について、それぞれの用法の変遷を述べる。続けて、二音節語基と（ク活用）形容詞語幹の関係が整理される。ここには、二音節語基が形容詞語幹かそうでないかで違いが見られる。例えば、語基が形容詞語幹でない場合には多くの例がある「語基＋ロ」（スゾロニ［漫］のスゾロなど）の形は、形容詞語幹の場合には見られない（ありえそうな場合でも、ホソラカ［細］のホソラのような「語基＋ラ」しか見えない）、などといった違いである。

先行論への広い目配りと、用例の博捜に基づく精緻な記述・考証は、氏の研究の特色としてこれまでも言及されてきたところであり、本書もそのスタイルで貫かれている。極めて堅実な研究手法の実践であり、論の内容以外にも、学ぶことの多い一冊である。

（塙書房、二〇二三年、四一八頁、一四、〇〇〇円＋税）

（いとう・ともひろ　藤女子大学講師）